しえん便り

R3年3月発行

3月第2号

教育相談の窓から～“安心感からはじまる成長”Ⅱ　　本校コーディネーター 中井 聖也

集団の力が成長に　「いっしょに」

また、保育所での取り組みもあり、友達との関係も良好であったこと。そして２つ上の兄の存在もＡ君の成長には不可欠だったと思います。

近所の公園や福祉センターに遊びにいっていたＡ君、はじめは、お母さんから全く離れられなかったそうです。しかし、少しずつお母さんが離れて友達と遊べるようになっていきました。あるとき、公園に行きたいといったＡ君に対して、家の用事をしていたお母さんは、「用事が終わるまで待って」と伝えたそうです。待ちきれなくなったＡ君は、一人で公園に行ったそうです。それを機会に、少しずつお母さんから離れて行動することができるようになりました。また、家に兄の友達がたくさん遊びに来ていたのを見て「僕も友達を家に呼びたい」とお母さんに相談してきたそうです。それを受けて、保育所で「どんな誘い方をしたらいいか」作戦をお母さんが、Ａ君に伝えていき、実際に誘うことができたということがありました。今はＡ君が友達の家に一人で行ったり、また、Ａ君の家に友達が来たりして、遊んだり宿題も一緒にしているそうです。

友達と遊びたいという気持ちを育てた、保育所という集団の力、そして、いい模範となった兄の友達関係があり、「もっと友達と遊びたい」という気持ちが、Ａ君の中で育ち、安心感のあるお母さんに「どうしたらいい」という相談をする。その相談にしっかりとお母さんが応えてきた。今の友達関係が充実しているのは、そういった取り組みの成果だと思います。

共感からはじまる子育て　「そうだね～」

さて、いろいろな成長を見てきましたが、その幹の部分には何があったのかを考えたいと思います。それは、Ａ君にとってお母さんが「安心感のもてる場所」であったという一言に尽きると思うのです。不安いっぱいの世界に、一歩踏み出すとき、どうしても安心アイテムが必要となります。「不安だけど頑張ってみよう。けど、うまくいかないかもしれない。けどやってみたい。怖い。」いろいろな葛藤が子どもの中で起こっています。そんなときにＡ君には、「ほっとできる場所（お母さんの存在）」があるからこそ、不安な場所にも挑めたのだろうと思うのです。なぜ、お母さんが安心できる場所になったのか、それは、お母さんが、Ａ君の気持ちに寄り添うことを最優先に考えて、Ａ君のペースでの成長ができればと関わってこられていたこと、また、頑張って欲しいことも、Ａ君が自分から頑張り始められるように、十分時間に余裕を持って言葉がけをして、頑張るペースをＡ君と相談して決めるなどしてきたこと、そして、頑張りの結果が世間で考えるものには、届かないものであってもＡ君を責めることなく、本人なりに頑張

っているところを認めて言葉がけをされていたことなど、A 君への「共感」を大切にした「子育てをされてきたからだと思います。

自己肯定感を太らせる　「うん、だいじょうぶ」

A 君が小学校に入学してからも、どんどん成長しているという報告を聞く中で、この成長は、お母さんの時間がかかっても「共感」から始まる子育てを続けた結果、A君の自己肯定感が育ってきたことによるものだと思います。

自己肯定感という言葉について、高垣忠一郎氏は「自分が自分であって大丈夫」という気持ちであること、そのままでいる自分が許される安心感を持つことが、その気持ちを育てる上で大切だと言われています。また、子ども自らが試行錯誤する中で、そして、失敗しても許され「大丈夫」と感じることから自己肯定感は生まれるということ。そして、子どもを見るときは、「共感の目」(「子供の目に世界がどのようにどのように映っているか、どう感じられているか」を見てみよう。感じてみようとする目）と「評価の目」(「子どもが人間として大切な力をしっかり身に付けながら、育ってきているかどうか」を客観的に冷静に評価しようとする目）の２つの目で見ることの大切さも述べられています。

お母さんの話を聞き、A 君の成長を見ると、A 君とお母さんの信頼関係、そして A 君自身の自己肯定感は、とても強い物になっているだろうと感じました。今後も思春期の波などいろいろな荒波が来ても、お母さんの寄り添う姿勢で、A 君自身が、しっかりと乗り越え、大きく成長していけるだろうと感じました。また、自分が子どもを見るときに、お母さんのように「共感の目」が開いているのか、反省させていただきました。

参考文献　高垣忠一郎（２００４．７）「生きることと自己肯定感」(新日本出版社)

「できないことの意味」～A 君とお母さんに学ぶ

A 君は、自分で歩けるのですが、外での移動では、いつもお母さんに抱っこを求めました。また、家のトイレ以外利用できず、保育所ではずっと我慢していました。

一見マイナスに思われる A 君のこのような行動ですが、見方を変えると、これらは「お母さんに抱っこされると外出ができる」、「お家のトイレでは問題なく用を足すことができる。」と、プラスの力として捉えることができます。外出時の抱っこや、トイレのこだわりは、不安な外界を取り込みより大きな自分になるために A 君が決めた〝挑戦への手立て〟自己決定だったのです。

お母さんの子育てのポイントは、これら A 君の「手立て」を否定することなく、その上に次のステップへ向かう材料を丁寧に積み上げていくものでした。

子どもが自分で考え、自分で選択する〝自己決定、自主選択〟は、基本的な子どもの権利として、生活や教育の場で最大限尊重されなければいけません。A 君の自己決定を尊重したお母さんの子育ては、彼の中に確かな自己肯定のつぼみを膨らませ、小学校の友だちの中で響き合える柔軟な自我を育んでいきました。

私たちコーディネーターも、様々な相談活動の中で、子どもたちの「できること」を喜び合い、次の一歩を踏み出す応援をさせていただきたいと思います。

浦木